

パウロの書き残した手紙を通して、神様の真実を学んでいるわけですが、やっぱりパウロという人は特別な器だなとうならされるような、すごい表現に出会うことしばしば。今日もそういう思いで解き明かしを準備したのですが、ここでパウロが何を言っているかということ、「ユダヤ人は決して神から捨てられてはいない、なぜなら私がいるからだ」ということを言っている。新共同訳では分かりにくいですが1節がそういう文章。

今日の言葉はこう始まる「では、尋ねよう。神はご自分の民を退けられたのであろうか」。これは9章からここまでの議論を踏まえてのもの。もはやイスラエルは特別な神の民ではなくなってしまったのか。関係が切れたのか・・・ここで使われている「退けた」という言葉は、「捨てた」と訳してもいいが、押しつけた、拒んだという言葉で、神がその民を拒むという風に使われることはここ以外にはない。そうではなく、民が神の言葉を拒んだり、神の人であるモーセを拒むという時に使われる。使徒言行録13:46「パウロとバルナバは勇敢に語った。神の言葉は、まずあなたがたに語られるはずでした。だがあなたがたはそれを拒み、自分自身を永遠の命を得るに値しない者にしている。見なさい。わたしたちは異邦人の方に行く。」これこそ9章からテーマになってきたユダヤ人の拒絶と異邦人への救いの歴史の展開ということ。それはユダヤ人の拒絶ゆえのこと。そうやって拒むユダヤ人のことを、神様もまた拒まれてしまったのか、という問い。もはや愛は冷えてしまったのか。

そういう問いに対し、「決してそうではない」。この言い回しはとても強いもの(9:14も)。そんなことはあるはずがない。神はイスラエルを見捨てたりなさらない。今日の聖句表に、神とイスラエルとの特別な関係を教えてくれる御言葉をピックアップ。この神の愛は変わらない、昔に与えられた約束は決して変わることはない。これはすでに9章でも言われていたこと。9:6。今日のところはその念押しとも言えるのですが、違っているのは論証の仕方。9章の時は旧約の歴史をたどり直すようにして、神の約束は何も変わっていない。ただ、選びの民といってもイスラエル民族がそのまま全部神の民というわけではない、血統上ではユダヤ民族として生まれてきた者たちの中でも恵みによって選ばれた者たちが神の民であって、それは昔も今も同じ、何一つ変わっていないのだと、聖書から論証していくというかたち。しかし今度は違う。今度は、わたしを見てくれと、自分という存在を重要証拠として持ち出す。「神はユダヤ人を拒んでなどおられない。昔からの愛は変わらない。なぜなら、私がいるからだ」、それが次の言葉。

「わたしもイスラエル人で、アブラハムの子孫であり、ベニヤミン族の者です。」だってわたしだってイスラエル民族なのですよ。生粋のユダヤ人なのですよ、それでもちゃんとキリストに導かれたのです。ちゃんと神の恵みをいただいているのです、だから、ユダヤ民族が愛されていないなんてあるわけない、わたしが証拠だ！！

この言葉はすごいなあと思う。なかなか言えるものではない。この言葉には、自分がユダヤ人を代表しているとの自負が見える。ベニヤミン族の出身だというのは、フィリピ書なんかでも挙げていることだけど、自慢になるようなことだったのでしょ。ラビの伝承で、出エジプトの際に紅海を渡ろうとした時に真っ先に海に飛び込んだのがベニヤミン族だったともされるので、確かに名実ともに生粋のユダヤ人と言えた人ではある。でもそういうこと以上に、彼の言葉から伝わってくるのは、自分の同胞に対する責任感です。そして自分という一人のキリスト者の存在の重みの自覚です。神様の壮大な救いのご計画がこの地上で実現していくそのプロ

グラム の進展において、自分という者がユダヤ民族の中に確かに起こされた。それは小さな一人に過ぎないけれど、でもどんな大きな教会だって最初はひとりから始まったのです。どんな大きなダムだって、アリの一穴のような小さな穴が開くならば、そこから崩れる可能性が開かれるのです。そのように、パウロという人の存在は、神がユダヤ民族の中に確かに打ち込んでくださったくさびであり、救いの奇跡の始まりでありました。そういう自分という一人のキリスト者の存在を、彼は決して軽んじてはいないのです。その重みを知っている。だから、私が証拠だと言うのです。私がいるということは、神が決してユダヤ人を見捨ててはおられない証拠だと言い切るのです。

私たちはパウロとは違うかもしれません。彼の様な特別な使徒として召されたわけではない、それこそ名もなきひとりのキリスト者に過ぎない者たちです。でも、全人類を救いに招こうとする壮大な神のご計画の中で、私という者がこの茅ヶ崎の地に起こされていることの重大な意味を見落としてはいけないのではないかと思います。

宣教師からこんな風に教えてもらったことを思い出しました。自分が祈らなければ日本が減びると思って祈りなさい。ここにもまた自分の周りの人たちに対する責任感と、自分という存在の重みが教えられています。自分が祈らなければ日本が減びる、茅ヶ崎の街が減びる、自分の学校が減びる、自分の家が減びる・・・あるいは、この教会が減びる。やや悲壮感さえ漂っているような重い教えです。パウロの言葉にもまた悲壮感が漂っていました。神はもうユダヤ民族をお見捨てになったのではないか、もう愛しておられないのではないか、そのように問いを立てずにはいられない、それが彼にとってどれほど苦悩に満ちたことであったかと思う。でも同じように今私たちも問わずにはおられないのでは。神はこの日本という国をお見捨てになったのか、日本の教会をお見捨てになったのか、あるいははじめから愛してなどおられなかったのか。がんばっても伝道が進まない、むしろ泥船から降りるようにして教会から離れていく人がたくさんいる。もう私たちから神の栄光は去ってしまったのか、神はお見捨てになられたのか。そう思わずにはいられないような悔しさを、皆さんも味わってこられたのではないか。

しかし、今日の御言葉は教えてくれる。断じてそうではない、神は私たちをお見捨てになることなどありえない。なぜなら、私がここにいるからだと言ったのです。私がいる、私が救われた、私がキリストのもとに導かれた、それは神がここに救いをもたらそうとしておられることの証拠だ。神がこの民族を愛しておられることの証拠だとパウロは言ったのです。そして教えてくれるのです。あなたたちもそうではないか。あなたがいるではないか。あなたというひとりのキリスト者が、確実にここにいるではないか。起こされたではないか。救われたではないか。それは、神があなたとあなたの共同体を愛しておられる証拠だ。あなたという存在が、神がこの国を見捨てておられない証拠だ。この教会を見捨てておられない証拠だ、あなたの家族を、あなたの職場を、見捨てておられない証拠だ。だから、信じて祈りなさい。決して見捨ててはおられないから、信じて祈れ。まずあなたが祈れ。その祈りから救いが始まる。そんな風に教えられているのだと思うのです。あの宣教師の言葉も、そんなパウロの魂を忠実に受け取ったものであると思います。小さなキリスト者の小さな存在ですが、そこから開かれる大きな救いの可能性があるのです。だから、自分が祈らねば日本が減びると思って祈りなさいと、宣教師は教えてくれたのだと思います。

そしてこの言葉には続きがあります。「自分が祈らねば日本が減びると思って祈りなさい。そして、祈ったら忘れなさい」と言うのです。祈ったらもう忘れていい。なぜなら、祈ったなら、

もうあとは神様のご責任だからです。悲壮な覚悟をもって祈るのだけれど、周囲の人たちへの責任感をもって祈るのだけれど、その責任は私たちが背負う必要はない。神様が背負ってくださいます。そこから先は神様がなさることですし、神様がお決めになることです。私たちはもう忘れていい。私たちがどれだけ心痛めて祈ったところで、人の心は変えられません。私たちにはできないことがあるのです。でも、神様には不可能はありません。神様は、救うとお決めになった者は必ず救い出されます。どんなにかたくなな者でも、決してあきらめないで砕かれる。人は神を退けても、拒否をしても、神は決して退けないで、見捨てないで、無限の愛と力をもって必ずキリストのもとへと導かれる。だから信じてお任せすればいい。だって、私たち自身がそうやって救われたからです。

私たちがまた神様からすれば、かたくなに神を退け拒むような者だったのではないか。みんなそうではないか、あの時あの人に出会わなければ、あの本に、あの言葉に出会わなければ、一步間違えたらここにはいなかった、どうして今キリストを信じる者としてここにいるのか考えてみると不思議でならない。みんな、驚くべき不思議な御業によってキリストのもとに招かれた者たち。それはまったく神の恵みによる。私がどれだけ拒もうとも、決してあきらめることなく、もう関係を切ってしまうこともなく、関わり続け、手を離されなかった神の恵みによる。パウロだってまったくそういう思いだったはずです。こんな私でも救われた・・・、誰よりもその思いが強かったことでしょう。キリストを憎み、キリストの弟子たちを迫害し、キリストの福音をかたくなに退けた、でもそんな自分を、神は退けにはならなかった。決して見捨てはなさらなかった。だから、今はどうにもならないほどにかたくなになってしまっているユダヤ民族であっても、決して神は退けたりなさらない。関係を切ったりなさらない。こんな私でも救われたのだから、神は必ずふさわしい時に、ユダヤの同朋たちからも救われるべき者たちをキリストのもとに導かれる。

今日の言葉の奥に込められているのは、そういうパウロの確信なのではないかと思います。そのあと預言者エリヤの物語を引用しながら語っているところも面白いので分かち合いたいのですが、次回にしましょう。ここにあるのも、確かに神に選ばれている者たちが存在しているのだという確信です。私が救われたということは、他にも救われる者が必ずいるのです。それは神の恵みによって起こされる奇跡なのです。